

佳作

## ありがとうと伝えたい

宮崎県 宮崎県立妻高等学校一年 村山 莉菜

私には五年間学校生活を共にした友人がいます。なんでも話すことができ、言いたいことがあれば本音でぶつかりあうことができる友人です。そんな関係だからこそ私は、友人に対して時々自己主張が激しくなってしまうことがあります。なにを言っても許してくれるだろうという安心感や、自分の全てを受け入れてくれるという自信から、言っただけでよいことと悪いことの区別もせず、友人を言葉でたくさん傷つけてしまいました。

高校受験を控えた時期のことです。私は不安と緊張でとてもピリピリしていました。友人はもうすでに進路が決まっていたので私は置いていかれてしまったような気持ちになりました。学校の先生方は皆こうおっしゃっていました。

「受験は団体戦ですよ。皆さんお互いに助け合って乗りこえましょう。」

でもその時の私にはその言葉を受け入れることはできませんでした。結局受験するのは自分自身だ。これはま

ぎれもない個人戦であって一人で戦わないといけないんだ。そう思いました。ふと友人を見ると楽しそうに見えるてしかたがありませんでした。このプレッシャーに押しつぶされそうな日々からすでに解放されてるなんて。私はまだこんなに頑張っているのに。こんな気持ちばかりが頭をよぎりました。

「りなら絶対合格するよ。そんなに心配しなくても大丈夫だよ。」

友人はいつもこうして私を励ましてくれました。しかし、この時の私は素直にありがとうと笑顔で返すことができませんでした。それどころか出てくるのは皮肉ばかりでした。

「受験が終わったなんて本当に羨ましい。まだこれから受験が待ってる私の気持ち分かる。」

この言葉で友人はどれほど傷ついたでしょうか。私を必死で励まそうとしてくれていたのに、私は思いやりに欠けた対応ばかりしてしまいました。

二月十四日のバレンタインデーの日のことです。私はチョコレートを作る暇もなく、差し迫った入試に向け勉強をしていました。そんな時、突然家のインターホンが鳴りました。玄関に出てみるとそこには私の友人が立っていました。そして手作りのお菓子を手に持ち

「これ食べて勉強頑張りなよ。」

と言って、満面の笑みでそれを渡してきました。私はこ

の時のことを鮮明に覚えています。わざわざ家に来てまで応援してくれたのが本当にうれしかったのです。でもそれだけではなかったのです。部屋に入ってお菓子の袋を開けると中に手紙が入っていました。

「いつもありがとう。入試までもうひと踏んばりだね。

頑張れって言葉あきたかもしれないけど、私には頑張れって言うことくらいしかできないのよ。ストレスが溜まって苦しいだろうけどりなら最後まで諦めずにやれるって信じてる。なにかあったらいつでも頼ってね。」

この手紙を読んだとき、友人がこんなにも自分を応援してくれていたんだと、初めて実感しました。手紙をくれただけではありません。友人が受験勉強で使ったわかりやすいテキストや、重要ポイントをまとめたノートを私に見せてくれたり、分からない問題を優しく教えてくれたりしました。友人が同じく受験勉強で苦しんでいたとき、私がちゃんと励ますことができたのかと言われると、そうではなかったと思います。自分のことだけに集中してしまい友人の苦しみを理解してあげることができませんでした。私は友人の優しさに胸がじんと熱くなりました。あんなに冷たい態度をとってしまった私を応援し続けてくれる。私の苦しみを自分のことのように考えてくれる。そんな友人はなかなか現れないと思います。だからこそ、大切にしなければならぬのだと改めて実

感しました。そして私も友人が苦しんでいるときは、寄り添って励まし力になりたいと思いました。

友人のサポートもあり、高校は無事合格することができました。合格発表の日、私の心は感謝の気持ちでいっぱいでした。

いつも一緒にいると相手のことをなんでもわかった気分になってしまふことがあります。何も言わなかった自分の思っていることは伝わるだろうし、友人のこともちゃんと理解しているつもりでした。ですが、この出来事がそんなことはないという気がしてくれました。思っていることは恥ずかしながら口に出さないと伝わりません。私はこれからもまた、色々な人に助けられることと思います。そんな時は笑顔で

「ありがとう」と伝えたいです。